

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 13日現在

機関番号：12611

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653069

研究課題名（和文） 開発途上国 Early Child Development への心理臨床モデルの適用

研究課題名（英文） Application of the clinical psychology to Early Child Development in developing countries.

研究代表者

青木 紀久代 (AOKI KIKUYO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：10254129

研究成果の概要（和文）：

アジアの一都市貧困地区で、小規模 ECD (Early Childhood Development) の実践研究を行った。早期教育に心理臨床的観点を取り入れ、乳幼児の社会的情緒を含む発達全般への支援となるよう、親のメンタルヘルスにも注意を払い、親子の関係性を促進させる心理教育プログラムを提案した。この事例から、コミュニティ主体で同種の支援活動を展開するためのシステム作りについて、可能性と課題を検討した。

研究成果の概要（英文）：

A small-scale study on ECD (early childhood development) was carried out in a poor district of an Asian city. Taking a clinical psychological approach to early childhood education, we proposed a psycho-educational program that aims to support general development—including the socio-emotional development of infants—by promoting relationships between parents and children as well as by focusing on parents' mental health. On the basis of this case study, we investigated the possibilities and issues involved in creating a system for developing similar community-based support activities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	0	1,300,000
2010年度	900,000	0	900,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,000,000	240,000	3,240,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学、臨床心理学

キーワード：ECD、親子の関係性、コミュニティ・アプローチ、途上国支援

1. 研究開始当初の背景

UNICEF は ECD の中でも、乳幼児期の社会情緒的発達の支援を最重要課題に挙げている。知的発達促進を狙った早期教育にも増して、心の発達支援は、国際的なニーズが高まっている。すでに幾つかの開発途上国で、NGO を中心とした乳幼児発達支援活動が開始されたが、これらのプログラムは地域の実態調査が十分でなく、問題点も多く指摘されている。そこで、地域資

源を活用した費用対効果の高いオリジナルプログラムを開発する必要性が、新たな緊急課題に浮上している。わが国では、国際協力開発機構 (JICA) がセネガルの子どもの生活環境改善計画事業 (2001-2004) や、メキシコのチアパス州都市スラム地域における女性の生活向上プロジェクト (2005-2007) 等を実施している。これらは3年間で1億円以上の予算規模を持つ国レベルの事業だが、それ以外はほとんどが、途上国経済開発への投資というのが実態である。

しかし、こうした大規模な援助のあり方とは対照的に、教育援助の分野では、市民団体（草の根）の献身的貢献も際立っている。国内のNGOの総数は、350を超え、このうち学校建設などを含めた就学・教育支援を行っている団体は、100団体にのぼる。さらに、援助対象国の内訳は、アジア諸国が9割、アフリカが1割程度で、日本のNGOのおよそ3分の1の活動は、アジアの子どもたちへの教育支援だと言えることができる。ただし、現地に適合するような教育プログラム開発等のソフト面での支援は、まだ少数に留まっている。

また、3歳以前の乳幼児のECDとなると、親子分離による集団指導は現実的ではない。親子の関係性への援助を軸に、いわゆる学習面の強化というよりは、子どもの社会情緒的な発達の促進を目指す援助の方が、現実的なニーズに合致していると言えるであろう。

筆者らは、草の根のNGOの一員として教育支援を行った経験から、日本の子育て支援と同様に、地域援助の発想をもった、心理臨床的支援が有用であると確信し、試行的な実践を重ねてきた。

2. 研究の目的

そこで本研究では、貧困の問題を抱えるアジアの一都市において、心理臨床的な視点を加味した小規模なECDプログラムの実践を試みる。

すなわち、(1)乳幼児の社会的情緒を含む発達全般への支援となるよう、親のメンタルヘルスにも注意を払い、親子の関係性を促進させる心理教育プログラムを開発し、(2)コミュニティ主体でプログラムの維持的活動が可能となるシステムを検討する。

3. 研究の方法

(1) 実践のデザイン

本研究はアクションリサーチであり、実践デザインは、図1の通りである。研究成果で述べる主なステージごとに色分けした。

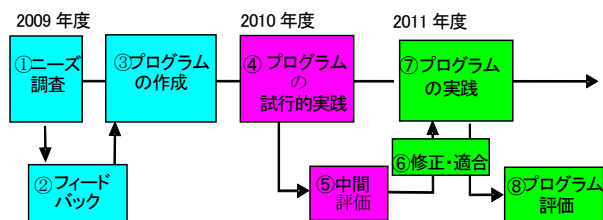


図1 本研究の実践デザイン

(2) 各ステージの概要

番号は図1の番号にそれぞれ対応している。

①ニーズ調査(2009年8月): 食事支援施設に通う乳幼児期の親子の支援プランを作成するために、そこに通う84世帯の親と0-5歳児66名を対象に、質問紙調査を実施した。質問紙の構成は、「家族背景」、「親の育児ストレス PSI-SF (Abidin,1995)」、「親のメンタルヘルス SDS(Zung,1965)」、「子どもの発達スクリーニング Child Development Chart (Irton,1994)」、「子どもの社会情緒 Ages and Stages Questionnaires: Social Emotional /ASQ:SE (Squires & Twombly, 2002)」であった。

②フィードバック(2009年11月): ニーズ調査の結果から見出された支援ニーズを、食事支援施設に資金援助する日本のNGOにフィードバックし、支援方針を討議した。

③プログラム作成(2009年12月-2010年2月): 上述のNGOメンバーと共に、親子の関係性促進をねらった全12回のプログラム(Happy Children's Club、以下HCC)を作成した。

④試行的実践(2010年8月-11月): 食事支援プログラム(Feeding Program、以下FP)受益者の1-2歳の親子48組に対して、現地カウンターパートのスタッフ3名がHCCプログラムを実践。プロジェクトメンバーが1ヶ月毎に実践に入り、運営面、親子への声かけへの助言を行った。

⑤中間評価(2010年8月-11月): 出席率、ドロップアウト率を算出した。全セッションはビデオに録画され、運営の様子を記録した。さらに、参加者の親34名に対して、プログラム最終回に、質問紙を配布し、満足度と感想、コンテンツの評価をしてもらった。

⑥プログラムの修正・適合(2011年3月-7月): 中間評価の結果をスタッフにフィードバックし、現地側の要望をヒアリングした。その結果をもとに、スカイプや電子メールを活用し、運営者とともに、対象児の年齢の拡大と、コンテンツを見直し、修正した。

⑦プログラムの実践(2011年8月-11月): 1-5歳の子ども62名、養育者43名に修正されたHCCプログラム全12回を実施した。最初の2セッションはプロジェクトメンバーが実践に入り、運営面、親子への声かけ等について助言した。

⑧プログラム評価(2011年8月-11月): 中間評価を若干修正したものに加え、プログラムの前後で、親の育児ストレス(PSI-SF)、子どもの愛着行動(Q-setを改定)に関する質問紙調査を実施し、アウトカムの評価を行った。また、スタッフへのグループインタビューを行った。

4. 研究成果

(1) ニーズアセスメント及びプログラムの作成まで (ステージ①-③)

<親子支援のニーズ>

調査結果から

養育環境（社会経済的状況、家族背景、親の育児ストレス、メンタルヘルス）のアセスメント結果を表1に示す。

表1 養育環境のアセスメント結果

	N	平均値 (カット)	SD	range	カット超 (%)
家族背景・社会経済的状況					
母親年齢	83	31.71	6.91	17-47	
父親年齢	78	33.99	6.87	17-53	
同居人数	84	8.05	4.05	3-25	
子ども数	84	4.25	2.48	1-14	
収入(日)	84	186.08	93.78	50-600	
食費(日)	83	126.89	60.42	20-442	
親のメンタルヘルス	84	41.49 (50)	8.18	28-60	14名 (16.7)
育児ストレス	83	89.39 (91)	14.78	59-120	42名 (51.2)

この結果から、食事支援施設に通う家庭は昼食の無料配給を受けているにも関わらず、収入の3分の2が食費に当てられている過酷な貧しさの中で生活していることが分かる。また、親の育児ストレスも高く、これらは慢性的な貧困によるものと解釈された。本調査で用いられたPSI-SFは、「親自身のストレス」「親子の関係性」「子どもの特徴」の3つの側面のストレスを測定している。各側面でカットオフ得点を超える親の割合は、「親自身のストレス」が52.4%、「親子の関係性」が36.9%、「子どもの特徴」が23.8%であった。この結果からは、慢性的な貧困による影響が、親自身のストレスに加えて、親子の関係性の領域にも及んでいることが伺われた。

実践に反映させる課題と工夫

以上より、第一には、貧困生活による親のストレス及びメンタルヘルスのケアの必要性が見出された。しかしながら、現地には、メンタルヘルスが悪い者は精神病患者であるという固定観念と、それを忌み嫌う慣習が強い。そのため、あくまでもより良く、楽しいサービスとする必要があると考えられた。

<子どもの発達状況>

調査結果から

15-65ヶ月の子どもの社会情緒の評価結果を表2に、35ヶ月以下の子どもの発達面の評価結果を表3に示す。子どもの社会情緒の発達は、27-32ヶ月、即ち2歳児が最も低い結果となり、早期の介入の必要性が見出された。

表2 子どもの社会情緒の状況

子どもの月齢	N	平均値 (カット)	SD	range	カット超 (%)
15-20ヶ月	2	22.5 (50)	3.54	20-25	0名 (0.0)
21-26ヶ月	8	40.0 (50)	16.04	20-60	3名 (18.8)
27-32ヶ月	18	54.4 (57)	22.61	30-105	9名 (50.0)
33-41ヶ月	7	49.29 (59)	22.63	15-80	2名 (28.6)
42-53ヶ月	14	50.71 (70)	32.16	10-110	2名 (28.6)
54-65ヶ月	16	43.75 (70)	21.87	20-85	3名 (18.8)

その他の発達面では、運動発達(粗大・微細)で境界域と判定される子どもが比較的多くおり、これらは貧困によるモノ不足や発達年齢に応じた遊びの経験不足によると考えられた。

表3 子どもの発達水準と領域のクロス表

発達の領域	評価			計
	正常域	境界域	遅滞域	
社会性	26 100.00%	0 0.00%	0 0.00%	26 100.00%
生活習慣	22 84.60%	4 15.40%	0 0.00%	26 100.00%
粗大運動	19 73.10%	7 26.90%	0 0.00%	26 100.00%
微細運動	12 46.20%	12 46.20%	2 7.70%	26 100.00%
言語	20 76.90%	6 23.10%	0 0.00%	26 100.00%

実践に反映させる課題と工夫

子どもの発達面の評価の結果から、まずは、2歳以下の乳幼児とその親を対象にしたプログラムの作成が望ましいと思われた。即ち、子どもの発達に応じた遊びをコンテンツに多く取り入れながら、親子の相互交流を促すことによって、親子の関係性の促進に寄与するようなプログラムの立案が考えられた。

<プログラムの作成>

アセスメント調査後に作成され、試行されたプログラムのコンテンツを表4にまとめた。全12回のセッションは、毎回、ダンス、リズム遊び、出席確認という定例の活動で開始する。その後、その回のメインの遊びを行い、再び定例の絵本の読み聞かせや手遊び、バルーン遊び、親のシェアリングを行い終了する。ここでは、この流れを作る一つ一つの活動をアクティビティと呼ぶ。表中のコンテンツはこの定例のアクティビティの中で、その日のメインアクティビティとなる部分を示している。

表4 各回のメインアクティビティ

回	コンテンツ
#1	【出会いの会】自己紹介、子どもと遊ぶことの説明
#2	リトミック：音に合わせて動く。がたごと車、こげこげボート、ロンドン橋など
#3	ゲーム：水遊び
#4	ゲーム：新聞遊び
#5	ゲーム：障害物コース
#6	工作：模造紙へお絵かき
#7	リトミック：音に合わせて動く。がたごと車、こげこげボート、ロンドン橋など
#8	工作：スタンプ遊び
#9	リトミック&ゲーム：カード遊び
#10	ゲーム：さかなつりゲーム
#11	ゲーム：ビーチボール遊び
#12	【まとめの会】子どもと遊ぶことについての小講義。 子どもへの気づきのシェアリング。家やセンターで、子どもと遊んでみての感想。アンケート。

注) マーカー箇所は中間評価後、変更となった



写真1 プログラムの様子

(2) 中間評価 (ステージ④-⑤)

<試行プログラムの評価>

出席状況

平均参加回数は全12回中7.1回(N=48、レンジ=0-12、SD=4.9)であり、48組中14組(全体の29.2%)がドロップアウトした。ドロップアウトの理由は、仕事や出産、他児の世話等である。出席状況を改善する必要がある。

なお、継続的な参加が可能だった参加者は7割だったが、そのほとんどがプログラムの満足度が高く、継続参加を希望していた。

参加者による評価

主な結果は図2の通りである。ほぼ全員の親が「楽しめた」、「次回も参加したい」と答えており、ストレスケアのために、「より良く、楽しいサービス」が提供できたことが示された。また同様に、「子どもについて新しい気づきがあった」「親子関係がより親密になった」と答えた親もほぼ全員となり、親子の関係性促進というね

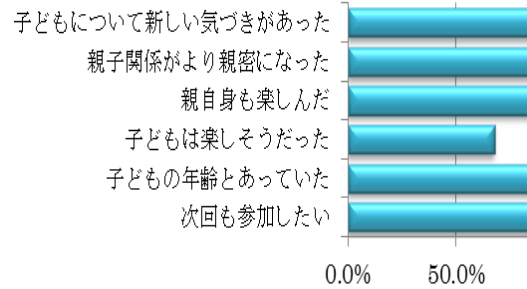


図2 プログラムに対する参加者評価

らいもおおよそ達成されたと思われた。プログラムの改善点や継続に関する自由記述においても、親子関係の大切さを親が感じたことや、親子の関係がより親密になったという記述が多く、これを裏付けるものである。

また、親の予想を超えて、子どもが新規な活動に取り組む様子に、親は肯定的な気持ちや子どもへの良い期待を高めていた。子どもが開放的、自律的に振る舞う様子に着目した記述も多かった。

こうした親子の関係性や、子どもの成長に関する親の気づきが生まれた背景には、運営スタッフによる継続的な気づきを促す働きかけがあったと考えられる。その様子は、ビデオ記録、現地スタッフの運営記録等から確認された。「スタッフによる気づきを促す働きかけへの支援」こそが、プログラムの実践において、研究代表者らが最も重視した心理臨床的支援の一つだと言えるだろう。

一方で「子どもは楽しそうだった」「(コンテンツは)子どもの年齢とあっていた」と答えた親の割合は、上述の質問に比べて低く、子どもの発達に応じたアクティビティの提供について課題が残った。

<中間評価から得た主な改善点>

ドロップアウトや欠席への対策

仕事や出産といった外的要因から、ある程度のドロップアウトや欠席は避けられない部分もある。また、現地の家庭では子どもの数が多く、プログラムの対象年齢外のきょうだいを伴っての参加が制限されていたことも、参加が難しくなった要因の一つと考えられた。

不評なアクティビティへの改善策

子どもの発達状況にそぐわず、親子とも楽しめなかったアクティビティがいくつかあった(表4注参照)。現地スタッフのアイデアをより一層生かせる体制を整え、修正作業を行った。

(3) プログラムの修正と評価 (ステージ⑥-⑧)

<HCC コンテンツの修正>

2010年の課題に対応するため、運営者と協議しながら修正を行った。

参加可能年齢の拡大と参加者の選定

ドロップアウトや欠席を減らすために、プログラムの対象年齢について、1-3歳を中心としながらも、きょうだいの参加を可能とすることとした。また、FPへの参加率を基準として参加者を選定した。

アクティビティの代替と工夫

2010年の評価から、表4でマーカーされている不評であったアクティビティについて、代替案を作成した(表5)。また、継続とするアクティビティにも、運営スタッフと協議しながら、現地により適合し、子どもの発達状況にあったものとなるように工夫を加えた。

表5 修正されたアクティビティ

2010年のアクティビティ	代替案
工作:模造紙へお絵かき	お絵かきと粘土
工作:スタンプ遊び	親子体操
リトミック&ゲーム:カード遊び	つみき遊び

プログラム開始初期の2セッションには、プロジェクトメンバーが参与観察を行い、セッション後に運営スタッフとミーティングを設けた。参加しやすい環境作り、絵本の読み聞かせの導入方法、親子への関わりの視点など、運営について細かな確認を行った。プログラム中期には、ビデオ観察から親子の様子と運営スタッフの動きについてフィードバックを行い、運営の質を保つことに努めた。

<プログラム評価>

実施したプログラムが計画どおり運営されていたか(プロセス)、期待した効果は得られたか(アウトカム)について、評価を行った。

1) プロセス評価

出席状況

参加者の平均参加回数は8.8回(N=43、レンジ=0-12、SD=3.7)と前年に比べ高かった。一方ドロップアウトは43組中4組で全体の9.3%と、前年より低い割合となっていた。1セッションの平均参加人数は、25.4名(レンジ=16-34、SD=4.1)と前年の14.2名(レンジ=6-22、SD=4.0)よりも多かった。現地の意見を取り入れたことにより、出席状況は前年から改善が見られた。また、運営スタッフのモチベーションの維持にもつながったと考えられる。

参加者による評価など

参加者の満足度アンケート(N=33)では、全

員が「プログラムを楽しんだ」と回答した。好きな活動の記述では、新規の活動にも満足が得られていた。運営スタッフとの協働を重視することで、より現地に合った活動へ修正できたと考えられる。ビデオ記録からは、前年と比較してBGMや手遊びの活用などの工夫が見られた。

運営スタッフからは、運営上の気配りとして親子のアイコンタクトという相互作用の視点を持ち、子どもの探索を促すよう参加者に関わっていたことが語られた。実施初期にプロジェクトメンバーもプログラムに参加して運営方法や目的の確認を行ったこと、中期にはビデオ観察のフィードバックを行ったことにより、運営の質が保たれたと考えられる。また、他の活動が忙しく、運営スタッフ間の共有の実施や、運営頻度が保てなかったことがわかり、より無理なく実施できる形を模索する必要性が明らかとなった。

2) アウトカム評価

質問紙調査から

プログラムの前後に実施した質問紙調査から、子どもの愛着の安定性は、事前事後比較(ウィルコクソンの順位和検定)の結果1%水準で有意差が見られた(N=41、Z=-2.66、p<.01)。また、養育者の育児ストレス(N=31)について事前事後比較(ウィルコクソンの順位和検定)を行ったところ、全ての下位尺度と合計得点において1%水準で有意差が見られた(表6)。プログラムを通じて、目標としていた子どもの愛着の安定性が向上し、親の育児ストレスが軽減したことが示された。

表6 育児ストレス事前事後検定

下位尺度	平均値		Z
	事前	事後	
親自身のストレス	28.90	23.77	-3.71**
親子の関係性	28.42	22.94	-3.91**
子どもの特徴	31.32	26.03	-3.13**
育児ストレス合計	67.71	55.45	-3.91**

**p<.01

ヒアリング調査から

養育者同士のシェアリングでは、プログラムの初期には子どもや自分の楽しさ、新しい発見についての語りを中心であったが、最終回では「私と向き合っていると子どもが嬉しそうだと気づいた」という関係性への気づきや、「感情コントロールができるようになった」などの養育者自身の変化、子どもの行動や情緒の変化が語られた。スタッフからは、親との身体接触を回避していた子どもが親に近づくようになったなどの参加者の変化が語られた。

参加者からの感想アンケート(N=33)では、全員が「子どもの遊びや気持ちに興味を持つよう

になった」「家で子どもと遊ぶことが増えた」と回答した。普段子どもとの遊びの時間を持ってない親が多い中、プログラムを通して、子どもとの関係性や子どもの情緒や行動に注目するようになり、実際に家でも遊ぶようになったという行動の変化もあったことが示された。

(4) プログラム開発の実践から得られた示唆

本プログラムは、子どもの社会情緒的発達を促すために、子ども自身の教育機会を親がより良く提供できるよう開発されたものである。その基盤には、親の良好な応答性が維持されることが重要であり、この時期の親子の心理教育プログラムとして、それは広く認められるところである。過酷な生活環境の中で、親のメンタルヘルス面でも援助が必要だと考えられるケースも多く見受けられた。しかしその点が、プログラムを実施する上で最も慎重を要する事柄ともなった。ニーズアセスメント調査の段階から、そのような視点を子どもの育成プログラムに取り入れることがなぜ必要なのか、あるいは当該地域では、それを扱うことが本当に必要なのか、現地の視点に立って吟味し続けねばならない。

現地に根付かせるシステムを育てる工夫として、文化的な状況を配慮することは、従来から指摘されているが、心の援助には、リスクを見つけてそこに介入する直接的な方略にこそリスクがある、ということを考えたい。

また、中間評価などから、幾度か細かな修正を経た本プログラムは、一つの支援プログラムとしては小さなものに過ぎないが、本研究のフィールドとなった食事の配給施設などのように、生活支援の柱となる施設に通う人々に対して、心の援助を加えられる利点が見された。支援団体の理解が得られれば、比較的安価で安全なプログラムであり、汎用可能性は高いと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計24件)

- ① 青木紀久代 2012 アジア貧困地区での子育て支援—小規模ECDプログラムのデザインと活用— 母子保健情報, 査読有
http://www.aiikunet.jp/practice/education_example/14895.html
- ② 青木紀久代 2011 間主観性と乳幼児期の心理臨床 FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会誌, 査読有, 4, 13-17.
- ③ 富田貴代子・青木紀久代・太田沙緒梨 2011 途上国における Early Childhood Development プログラムの効果—教師から見た子どもの社会的情緒面での学校適応コミュニティ心理学研究, 査読有, 14(2), 115-131.
- ④ 富田貴代子・青木紀久代・太田沙緒梨

2010 途上国における Early Childhood Development の実践—発達のアセスメントを生かす— 心理臨床学研究, 査読有, 28(4), 479-489.

他 20 件

〔学会発表〕(計19件)

- ① 青木紀久代・太田沙緒梨・富田貴代子・宮田真利子 2012 アジア貧困地域での生活に根付いた子育て支援の方略(1) —小規模型ECDプログラムの構築過程の検討— 日本心理臨床学会第31回秋季大会(確定), 2012年9月14-16日, 愛知学院大学.
- ② Ota, S., Aoki, K. & Tomita, K. The effects of early childhood development program in the Philippines(1). 13th Biennial Conference of the Society for Community Research and Action, 2011年6月17日, Roosevelt University (Chicago, USA)
- ③ Tomita, K., Aoki, K. & Ota, S. The effects of early childhood development program in the Philippines(2). 13th Biennial Conference of the Society for Community Research and Action, 2011年6月17日, Roosevelt University (Chicago, USA)
- ④ Aoki, K., Minamiyama, K., Konno, N. & Masuzawa, T. Childcare in the Promotion of Social-Emotional Development of Young Children. The 12th World Congress of the World Association for Infant Mental Health, 2010年7月1日, the Congress Center Leipzig (Leipzig, Germany)

他 15 件

〔図書〕(計5件)

- ① 青木紀久代・平野直己 2012 乳幼児期・児童期の臨床心理学 培風館 全224.
- ② 青木紀久代 2010 いっしょに考える家族支援 —現場で役立つ乳幼児心理臨床— 明石書店 全264.
- ③ 青木紀久代 2009 親のメンタルヘルス—新たな子育て時代を生き抜く— ぎょうせい 全205.

他 2 件

〔その他〕

Newsletter: Little Voices Vol.02 2012 Our Lady of Lourdes Sponsorship Program, Philippines 本研究の取り組みが紹介された。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木 紀久代 (AOKI KIKUYO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授 (10254129)

(2)研究分担者

無し

(3)連携研究者

仲野 好重 (YOSHIE NAKANO)
大手前大学・社会文化学部・教授 (90269803)

山下 洋 (HIROSHI YAMASHITA) 九州大学病院・
精神科神経科・特任講師 (20253403)

(4)研究協力者

太田 沙緒梨 (山梨英和大学・人間文化学部・
非常勤講師)

富田 貴代子・宮田 真利子 (お茶の水女子大
学大学院博士後期課程院生)

